

ウェルビーイング

## 幸福 追求としてのダルマ —秩序再構築過程に着目して<sup>1</sup>—

京都大学

田辺明生

### 序論

1980年代から1990年代前半にかけて、インドの公共圏におけるダルマの重要性を声高に語ったのはヒンドゥー主義者たちであった。ヒンドゥー主義(Hindutwa)から距離を置く知識人の多くは、アシス・ナンディーのような重要な例外を除いて<sup>2</sup>、公共圏における宗教の役割について語ることは当時なかった。しかし1990年代半ば以降、ダルマやダンマその他の宗教的イディオムは、さまざまな立場からあるべき社会秩序にかかる主張をなすのに盛んに用いられるようになっていく。宗教的イディオムの公共的使用に関わるこうした変容は、「関係性の政治」の重要性の増大と同時に起こっていると私は考えている。

ここでいう「関係性の政治」とは、人間と人間そして人間と自然の関係性を政治の焦点とし、その関係性のありかたおよびそのなかでの自らの位置づけを変えていこうとする共同的営為を指す<sup>3</sup>。現代インドにおいて「関係性の政治」の重要性が増大しているのは、自他の社会生態的関係性を批判的に検討し改善するために、多様な立場、利害、価値をもつ諸個人や諸集団が自らの声を上げ、公共的な討論と交渉の場に参加をなしつつある「ヴァナキュラー公共圏」の近年の台頭と関わる<sup>4</sup>。そこではヴァナキュラーな声をもつ多元的主体が公共参加をとげるなかで、グローカルな組織や制度を媒介として、諸政府・政党・司

<sup>1</sup> 本論は、2013年12月14-15日に龍谷大学で開催されたINDAS 全体国際シンポジウム“In Search of Well-being: Genealogies of Religion and Politics in India”にて報告した拙論 “Dharma as a Search for Well-being: On the Process of Norm-Remaking” の日本語版である。ただし本論の内容は、田辺明生「現代インドにおける宗教と公共圏」島菌進・磯前順一編『宗教と公共空間』東京大学出版会2014年と重複するところがあることをお断りしておきたい。

<sup>2</sup> Ashis Nandy, "An Anti-Secularist Manifesto." *Seminar* 314, 1985, pp.1-12.

<sup>3</sup> 「関係性の政治」は、近代政治における従来の主要形態であった、すべての市民の自由をめざす「解放の政治」や、諸コミュニティが国家資源の再分配を求める「要求の政治」と対比される。「解放の政治」や「要求の政治」の重要性は継続しているものの、現在、「関係性の政治」が新たな政治の焦点となっていると私は考えている。Partha Chatterjee, *Lineages of Political Society: Studies in Postcolonial Democracy*. New York: Columbia University Press, 2011; Akio Tanabe, "Toward Vernacular Democracy: Moral Society and Post-Postcolonial Transformation in Rural Orissa, India," *American Ethnologist* 34, no. 3, 2007.

<sup>4</sup> Akio Tanabe *ibid.*; Lucia Michelutti, *The Vernacularisation of Democracy: Politics, Caste and Religion in India*. New Delhi: Routledge, 2008; Taberez Ahmed Neyazi, Akio Tanabe, and Shinya Ishizaka eds., *Democratic Transformation and the Vernacular Public Arena in India*. London: Routledge, 2014.

法機関・市民団体・民衆組織・諸メディアなどを巻き込みながら、政党政治と非政党政治を含むさまざまなかたちでの対話と交渉が起きている<sup>5</sup>。「ヴァナキュラー」という言葉には、1)日常的に使う口語、という意味と、2)民衆の生活形式に即した、という意味がある。ここで「ヴァナキュラー公共圏」という言葉を用いるのは、公共圏での討論と交渉が生活世界の文脈とすりあわされ、民衆が自分たちの日常のことばで政治と社会を語り、自らの生活形式に則した政治と社会のあり方を公共的な活動を通じて求める動きに着目したいからだ。

現代インドにおいて展開している社会生態的関係をめぐる議論と交渉は、ダルマの観念を中心のひとつとして長い歴史のなかで行われてきたウェルビーイングを追求する過程(a search for well-being)の一端であると理解するべきであろう。ここでいうウェルビーイングは、幸福、福利、安寧などの意味を含むが、とりあえず「自己が自己自身および他者との関係においてよき満足の状態にあること」と定義づけられる。以下ではわかりやすく「<sup>ウェルビーイング</sup>幸福」と表記する。

インドの歴史においては、普遍的な<sup>ウェルビーイング</sup>幸福が追求される中で、ダルマの観念を軸としてつつダイナミックな秩序再構築が行われてきた。これが可能になったのは、より包摂的な<sup>ウェルビーイング</sup>幸福をめぐって、多様な視点からさまざまな見解が出され、そのあいだの議論と交渉が行われてきたからである。現代インドで民主主義が深化するなかで、ヴァナキュラー世界における多様性と、公共世界における普遍性とが媒介されて、新たな動態が展開しつつある。ここにおいてインド社会の特徴である多様性は、<sup>ウェルビーイング</sup>幸福の集団的な追求——それは新たな対話・交渉・摩擦・対立を含む——においてその倫理・政治的な可能性を示しつつあるといえよう。

## 1. 現代インドにおける宗教の公共的役割

現代インド・オディシャ州のフィールドから、ダルマやその他の宗教的なイデオロムが公共圏においていかに用いられているかについて二つの事例を紹介しよう。

まずは鉱山開発をめぐる問題である<sup>6</sup>。ヴェーダント・リソーシス社（以下、ヴェーダント社）はオディシャ州西部のニヤムギリ山のボーキサイト採掘を企てていた。しかし2010年8月24日、環境森林大臣ラメーシュは、オディシャ州政府とヴェーダント社が環境保護法および森林権利法に違反しているとして、ニヤムギリ山の開発許可を取りさげる旨を宣言

<sup>5</sup> Rajni Kothari, *Rethinking Democracy*. New Delhi: Orient Longman, 2005.

<sup>6</sup> 本事例の詳細は、次で論じた。田辺明生「関係性の政治—開発と生存をめぐるグローバルネットワーク」速水洋子・西真如・木村周平編『人間圏の再構築』京都大学学術出版会 2012年。

した。国民会議派幹事長（当時）のラーフル・ガーンディーは、その2日後の8月26日、ニヤムギリ山近くの村を訪れた。ラーフルは、以前2008年に当地を訪れたとき、あるトライブ民の若者が自分たちはニヤムギリ山を神として崇拝していると語ったことに言及し、「それはあなたたちのダルマです。私のダルマは、貧しい人や先<sup>アーディヴァーシー</sup>住民を含むすべての人びとの声が聞こえるようにすることです」と語った。政府の採掘許可取り消しとこのスピーチをめぐってはさまざまな波紋が生じた。オディシャ州のビジュ・ジャナタ・ダル（BJD）政権は、中央政府がトライブ民（アーディヴァーシー）の経済発展を阻害していることを批判した。一方、民衆運動家たちは、諸政党がこの問題を政治の道具としようとしていることについて不快感を示した。そしてニヤムギリ山に住む当事者であるドングリヤ・コンドたちは採掘中止を歓迎する一方、教育・医療・雇用における発展を望んでいることを表明した。だがラーフルがスピーチでダルマに言及したことについて、誰も批判するものがいなかったことは興味深い。1990年代初頭ならば、セキュラリズムの原理にもとることとして厳しい批判を受けていたことだろう。

こうしたことを鑑みると、現代インドの法的政治的領域においてはセキュラーな配慮および宗教的価値の双方を尊重することが要求されているようだ。ここでのセキュラーとは、公共圏から宗教を排除することではなく、さまざまな信仰や価値を持つ諸コミュニティを平等に扱うということである。そして宗教については、単に私的な領域における個人的信仰としてのみではなく、公共的な意志決定に関わる価値として尊重することが求められている。ここでも宗教的な価値を含むヴァナキュラーな生活形式や価値と、公共的で民主的な制度とがすりあわせられようとしている様子を見ることができる。そこにおいて、諸宗教の平等な扱いという意味でのセキュラーな配慮と、宗教的価値の公共的な尊重ということは矛盾するのではなく、むしろ相互補完的なものとして位置づけられている。

インド・オディシャ州からのもうひとつの事例は、村落自治体の民主化にかかるものである<sup>7</sup>。1992年の第73次憲法改正にもとづく地方自治体改革によって、県、郡、村落の地方自治体にたいして大幅な予算拡大と権限委譲がなされただけでなく、「指定カースト」「指定トライブ民」「その他の後進諸階級」は人口比率に応じて、そして女性は三分の一の、議席留保枠が与えられた。ここで新たな課題となったのは、新たに政治に参入する低カーストや女性を含めた多元的なアクターの固有性と平等な政治的権利を保証しつつ、全体の協力を確保するための、新たな社会的・政治的秩序を構築することであった。私は、低カーストの人たちがいかなる新たな社会ビジョンを提唱しているかを、インタビューを通じ

<sup>7</sup> 本事例については、次で詳細に論じた。田辺明生『カーストと平等性—インド社会の歴史人類学』東京大学出版会 2010年 第8章。

て明らかにしようと試みた。低カーストの村落議員たちになぜ立候補したのかを尋ねると、「村の発展に尽くすのが自分の義務(*kartabya*)だから」とか「みんなに奉仕(*seba*)をするため」という答えが口々に返ってきた。「義務を果たすべし」とか「奉仕として行為をなすべし」というのは、インド社会でよく聞かれる物言いだ。それはバガヴァッド・ギーターという人口に広く膾炙した聖典の教える宗教的イディオムでもある。私は当初、村人たちはただ耳に心地よい決まり文句を並べているだけと思いこんでいた。ところがインタビューを続けるにつれ、新たな地方自治のあり方を語る際のそうした宗教倫理的な決まり文句の使用が、より重要な政治・社会的意味をもっていることに気がついていった。地方自治体改革後のもうひとつ重要な語りとして、低カーストの人たちが「取り分」(*bhāga*)の平等を主張することがある。たとえばある人は、国家資源の分配の仕組みを次のように説明した。「(政府の予算は)すべて割り当てに応じて分配される。大きな選挙区は『取り分』がたくさんもらえる。全部そういうものだ」。私は、18世紀の職分権体制で地域共同体の生産物は職分権保持者たちに「取り分」に応じて分配されていたことを学んでいた<sup>8</sup>。長い時代を経て同じ言葉が使われることに強い印象を受けたが、そこでは意味のずらしがあった。18世紀には職分によって取り分は異なったのに対し、現在では、取り分が公正・平等に分けられるべきことが語られる。「取り分」というカースト分業体制の言葉は、現在、平等な権利の主張のために用いられるのだ。

こうした観点から、低カーストによる「義務」や「奉仕」という言葉遣いを再検討してみると、それは、伝統的なカースト分業体制においてそれぞれの集団の役割を正当化するものから、社会を構成する多元的な集団がそれぞれ政治過程に平等参加する権利を主張するものへと、機能的な変化を遂げていることに気がついた。同じような言葉遣いをしながらも、そこでは「記号体系の機能的変化」がはっきりと見てとれる<sup>9</sup>。つまり低カーストの人びとは、民主的な地方自治のあるべき姿を主張するのに、創造的に新たな意味で「義務」「奉仕」「配分」という宗教やカーストにかかわるイディオムを用いたのであった。彼らは、既存の社会関係と文化的価値に根ざし、誰もが正当なものとして受け入れざるをえない宗教倫理的な言葉を用いながら、実は支配カースト中心の政治社会関係を批判し、多元的な諸集団の平等参加と協力という、地域社会における民主的関係の新しいビジョンを提示しようとしたのである。

---

<sup>8</sup> 同右書 第1章。

<sup>9</sup> Gayatri Chakravorty Spivak, "Subaltern Studies: Deconstructing Historiography," in *Subaltern Studies IV: Writings on South Asian History and Society*, Ranajit Guha ed., New Delhi: Oxford University Press, 1985, p.330

これらの事例から、ダルマやその他の「宗教・世界的」(religio-worldly)<sup>10</sup>な理念は、既存の枠組みを批判し、「場所・時間・主体」(*deśa kāla pātra*)に応じた新たな社会生態的秩序を提起する潜在力を有していることがみてとれる。そうした潜在力は、人びとの行為主体性によって実際に発揮され、現実化されるのである。インドにおいて、ダルマの考えは秩序再構築のための理念的基盤として機能してきたといつてよいであろう。

## 2. 動態的理念としてのダルマ／ダンマ

上に挙げた事例が示すのは、「ダルマ」や「義務」や「奉仕」などの宗教倫理的な概念が、単に私的なものではなくむしろ公共的な場面において、既存の枠組や秩序への批判をなし、新たな関係のあり方を提示するのに用いられているということである。それは、公共圏における「宗教的なもの」の可能性を示唆するものである。ここでいう「宗教的なもの」は、意味と価値を志向する実践をその基底で支える〈リアリティ〉（実在、普遍的真理）への感受性とコミットメントおよびそうした感受性とコミットメントを基礎として自他の関係性を再構築しようとする志向性を指すものといえることができる。こうした「宗教的なもの」は、制度化され固定化された「宗教」と区別される。「宗教」と呼ばれるものは、確立された制度として、この世の意味と価値の体系を支える超越的な根拠（宗教的真理）を表象・媒介する装置（教会・寺院、教理・教典、宗教指導者などのセット）を備えている。「宗教」は、この世の意味と価値を支える超越的な根拠とその特定の表象・媒介にたいする信仰体系であると定義することができよう。「宗教」におけるコミットメントが制度に向けられるのに対して、「宗教的なもの」におけるそれは〈リアリティ〉そのものに向けられる。

ヒンドゥー・仏教世界における根本概念であるダルマは、〈リアリティ〉の働きであり、〈リアリティ〉へ至るための道である。別言すれば、ダルマは、この世の秩序を支える〈潜在的全体〉(the Virtual Whole)<sup>11</sup>の現実化（＝分化）のありかたを指す概念であり、またその〈潜在的全体〉とつながるための方便（道）を指すものであるといつてもよい。ダルマは「時間、場所、主体」(*deśa kāla pātra*)に応じて、特定の形に現実化するものであっても、決してひとつの媒介や表象に限定されるものではない。通常の「宗教」のようにひとつの特権的な媒介や表象で代表されないからこそ、ダルマを体系的に語るのは難しい。

<sup>10</sup> ここでの「世界的」の用法は、Viswanathan による。それは、この世における人間と人間また人間と非人間の関係性のありかたに関わるという意味で、世俗的かつ宗教的な課題となる領域を指す。Gauri Viswanathan, *Outside the Fold: Conversion, Modernity, and Belief*, Delhi: Oxford University Press, 1998.

<sup>11</sup> Yoshiaki Mihara, 2013. *Reading T. S. Eliot Reading Spinoza*. Ph.D. thesis submitted to the Faculty of the Graduate School of Cornell University.

ただダルマにおいては、バラモンとダルマ法典が特権的立場を与えられているのではない、という疑問があがるかもしれない。たしかに歴史上、ダルマの理念がバラモンの権威を再生産する支配秩序のイデオロギーとして作用してきた面があることは否定できない事実である。これはいわば、ダルマがある特定の表象秩序・社会秩序を特権化する「宗教」として機能していたということである。ダルマ法典はそうした「宗教」的な教典の代表と言えるだろう。だがこれは、ダルマが特定の規範表象を有する「宗教」としてのみ固定化されてしまったということの意味しない。ダルマ／ダンマがダイナミックであるのは、その現実化した特定の表象形態が常に批判と議論にさらされ、秩序を再構築するための概念的アリーナを提供してきたことによる。

興味深いのは、インドのダルマにおいては、特権的な媒介としてのバラモンの権威を認める一方で、それぞれの社会集団に対して、それぞれの方途を通じての「真理」や「神の力」とのつながりの道を認めていたことであつた。より具体的には、それぞれの社会集団はしばしば自分たち独自の神々や儀礼を有しており、バラモンの媒介を必要とせずに、神霊との交流を行っていた。その明確な形態が、憑依であり、呪術であり、歌舞を通じたトランスであつた。さらには、ヨーガやタントラにおける瞑想も加えてもよいだろう。これらは、個々人と〈リアリティ〉や〈潜在的全体〉がつながる方途であり、バラモンの特権的権威を相対化するものであつた。

つまり、インド社会のダルマには、「宗教」による秩序化の側面と、「宗教的なもの」によって秩序を超えたリアリティを探索しようとする脱構築の側面が、「伝統の内的矛盾」として双方共に備わっているということができよう<sup>12</sup>。インドの宗教の歴史において、バラモンの正統性に対する批判として最も重要なひとつは仏教であり、そもそも仏教によってダルマ（ダンマ）は秩序を批判的に再構築するための中心概念として採用され、インドの宗教思想において重要性を帯びるに至った。ただし、ヒンドゥー教の「正統」と現在ではされている諸テキストにおいても、伝統の内的矛盾すなわちダルマの動態的側面をみることは難くない。

ここでは二つの例のみを挙げよう。ヒンドゥー教においてもっとも人口に膾炙した聖典であるバガヴァッド・ギーターのなかでも特にしばしば引かれる章句は、クリシュナ神がアルジュナに以下のように語ったものである。「すべてのダルマを捨てて、ただ私にのみ庇護を求めよ、アルジュナよ」(18-66)。「すべてのダルマを捨てよ」とはどういうことかの解釈をめぐるのは、今日に至るまで人びとの間でしばしば熱い討論が行われてきた。本

---

<sup>12</sup> J.C. Heesterman, *The Inner Conflict of Tradition: Essays on Indian Ritual, Kingship and Society*. Chicago: Chicago University Press, 1985.

稿の用語法でいうならば、法典化された「宗教」へのこだわりは捨てて、最高神クリシュナに顕される〈存在〉そのものへの「宗教的な」探求のみへと心向けよということであろう。

またこれもきわめてポピュラーな聖典であるバガヴァッタ・プラーナにおいて、クリシュナ神は、彼を慕って自宅を抜け出して集まってきた牧女（ゴーピー）たちに次のように告げる。「女のダルマは夫と両親に仕え、子どもの面倒をみることだと知らないのか」と（X-29-33）。あまりに冷徹な言葉だ。牧女たちは当惑し嘆き悲しむ。しかし、その後、クリシュナは牧女たちとラーサ・リーラー（情愛の遊戯）と呼ばれる円舞に興じるのであり、これは善と悪を超えた絶対的な信愛（バクティ）の顕れであると説明される。ここに再び、宗教としてのダルマは相対化されるのである。

インドの歴史において、「宗教的なもの」におけるリアリティへの探求はカーストやジェンダーに関わらずすべてのものに開かれているという〈存在の平等〉に基づく考えは、バラモン中心的な正統に対する批判的な「異他<sup>ヘテロドックス</sup>的」見解として繰り返し登場してきた。仏教、タントラ、バクティ、神智学、アンベードカル主義などはそうした異他<sup>ヘテロドックス</sup>的な思想運動の例である。これらは、ダルマの構造秩序を問い直し、再定義しようと試み、「正統」からの反応および改革をもたらしてきた。これらの異他<sup>ヘテロドックス</sup>的な批判運動は、支配的な秩序から周縁化されてきた人びとが社会参加を遂げることを歴史的契機としていた。それらの人びとにより社会に新たな視点や価値がもたらされたとき、既存の秩序は問い直された。そこで新たな複数性を帯びた社会は、時代に合ったあるべき秩序はいかなるものかを再定義しようとしたのである<sup>13</sup>。

インドにおけるダルマ／ダンマは二つの側面を有していたといえよう。ひとつはバラモンと法典を中心とするオーソドックスな「宗教」による秩序構造化の働きであり、もう一つは現行の秩序を超えた「宗教的なもの」の探求によって秩序を脱構築する働きである<sup>14</sup>。ダルマの秩序は、「宗教」を維持しようとする正統<sup>オーソドクシー</sup>と、既存秩序を超えて「宗教的なもの」を追求しようとする異他<sup>ヘテロドクシー</sup>の相互作用によって脱構築と再構築をくりかえし、その内容を更新してきたのであった。

<sup>13</sup> ここでは検討できなかったが、ダルマという概念を用いないキリスト教やイスラームも、インド世界の秩序再構築にきわめて重要な役割を果たしてきた。ここでは果たせなかったが、多宗教世界としてのインドにおける、複数性を考慮に入れた秩序再構築の歴史を考察していくべきである。

<sup>14</sup> デュモンは宗教構造の変化を否定したが、こうした立場は維持することはできない。ルイ・デュモン『ホモ・ヒエラルキクスーカースト体系とその意味』田中雅一・渡辺公三訳 みすず書房 2001年

### 3. 「普遍」を求めて―「世俗／宗教」の二分法を超えて

「宗教的なもの」は、批判的合理性と連携しつつ既存の正統秩序を超えた普遍的真理を探究しようとする。それは、人間が普遍的な存在と真理を求めてからずっと続いてきた探究であり、そこには既存の規範に対する絶えざる問い直しがあった。別言すれば、「宗教的なもの」探究は、常に合理的批判と存在論的コミットメントの双方を含んできたのである。

「宗教的なもの」の可能性について論じるということは、現代における「世俗」および「宗教」の双方のカテゴリーを問い直すということにつながる。必要なのは、世俗であれ宗教であれ、アприオリに設定された真理の特権的な媒介・表象のありかた自体を問い直すことであろう。真に問うべきは、それぞれの生きる主体が普遍的真理との関係において自らのあり方をより創造的に探究することはいかに可能なのかということである。そうした創造的な生の探究が可能になるためには、それぞれの主体が真理へとアプローチする、あるいは真理と共に生きる自由が確保されていなければならない。ここにおいて合理的批判と存在論的コミットメントは補完的に機能する。

現代において、思想の自由を求める世俗合理主義が、特権的で固定化された媒介・表象をもつ「宗教」の公共的役割を否定的にとらえるのは十分に理解できることである。また政教分離主義という制度も、思想と言論の自由と多元性を確保するために必要であろう。しかし他方で、世俗的合理主義が宗教的なものに公共的役割を認めようとしないとき、そこには一定の限界があるように思われる。自己の認識の正しさを疑おうとしたデカルト的懐疑は、既存の権威を批判する上で大きな役割を果たした。それには大きな意義があったといえよう。しかし、科学的認識の基礎として自己（コギト）に依拠することは独我論に陥る傾向性があり、自他をまたぐ社会生態関係の倫理的基盤をもたらしものではない<sup>15</sup>。

私たちは、社会生態関係そしてより根本的には「共にあること」の価値的基盤をどこに求めることができるのだろうか。世俗的合理主義の立場からはヒューマニズムがその答えとされる。しかしそのヒューマニズムの基盤はどこにあるのかという問いは残る。どのような「イズム」を唱えようとも、わたしたちの社会生態関係を支える存在論的な基盤を問い続けることは必要である。

近代という時代は、より多様な視点との邂逅を可能にし、また伝統的な権威主義からの自由をもたらした。それは既存の規範に対する合理的懐疑と、存在論的基盤へのより自由な科学的・宗教的追求を可能にした。19世紀後半から20世紀初頭にかけては、宗教伝統を

---

<sup>15</sup> Edward W. Said, *Beginnings: Intention and Method*. New York: Columbia University Press, 1997.

問い直し普遍的な価値を求めようとする思想運動がグローバルに展開した時期であった。19世紀のヨーロッパでは仏教が普遍的世界宗教として「発見」され、キリスト教は唯一普遍の宗教としての位置づけから相対化されるに至った<sup>16</sup>。19世紀末からは、仏教復興運動が、スリランカのダルマパーラ、神智学協会のオルコット大佐やブラバツキー夫人、日本の日蓮宗や浄土真宗などがからみつつ、トランスナショナルに展開した。これらの宗教的な問い直しの運動は、社会主義、ヒューマニズム、フェミニズム、ヴェジタリアニズム、ナチュラリズム、奴隷解放運動、反帝国主義、非暴力平和運動などの、既存の権威を批判しオルタナティブの普遍性を探究する諸運動や諸組織と思想的にも人的ネットワークにおいても強いつながりをもっていた<sup>17</sup>。近代世界における真理の探究において、宗教における異<sup>ヘテロドックス</sup>他的な問い直しと世俗的合理主義はごく密接な関係を有してきたのである<sup>18</sup>。ヒンドゥー教においては、ブラフマ・サマージ、アーリヤ・サマージ、ラマクリシュナ・ミッションなどの宗教社会改革運動が起こったが、これらは「普遍」との関連においてダルマ／ダンマを批判的に再定義する試みであったとみることができる。

こうした歴史を背景に考えるならば、アンベードカル<sup>19</sup>の仏教改宗運動は合理的批判と存在論的（宗教倫理的）コミットメントを組み合わせたものだといえないだろうか。アンベードカルは、『ブッダとそのダンマ』において次のように言う。「宗教は個人的なものである。...これとは逆にダンマは社会的なものだ。ダンマは義である。生活のすべての領域における人間と人間の正しい関係ということである」<sup>20</sup>。ここにおいてアンベードカルは、ダンマの秩序再構築の機能に触れている。現状のカースト秩序を批判し脱構築したのち、アンベードカルは新たな社会秩序を構築するための倫理的基盤を必要としたのであった。仏教のダンマが彼の答えとなった。アンベードカルは「智慧」(“Prajna”)と「慈悲」(“Karuna”)をダンマの礎石とすることを提案する。既存秩序における迷信から自由になるための「智慧」、そして新たな社会関係を築くための「慈悲」である<sup>21</sup>。彼は明言する。「ダンマの目的は世界を再構築(reconstruct)することにある」<sup>21</sup>。現代インドにおけるアンベードカル主義仏教運動は、人間と人間<sup>22</sup>の関係を再構築することが最も重要なアジェンダのひとつで

<sup>16</sup> Tomoko Masuzawa, *The Invention of World Religions: Or, How European Universalism Was Preserved in the Language of Pluralism*. Chicago: University of Chicago Press, 2005, Ch. 4.

<sup>17</sup> Leela Gandhi, *Affective Communities: Anticolonial Thought, Fin-De-Siècle Radicalism, and the Politics of Friendship*. Durham & London: Duke University Press, 2006; 安藤礼二 2010年 『場所と産霊—近代日本思想史』 講談社。

<sup>18</sup> Gauri Viswanathan, "Secularism in the Framework of Heterodoxy" *PMLA* 123, no. 2, 2008.

<sup>19</sup> B. R. アンベードカル『ブッダとそのダンマ』 山際素男訳 三一書房1987年 216頁（適宜改訳）

<sup>20</sup> 同上 217頁 （適宜改訳）

<sup>21</sup> 同上 220頁 （適宜改訳）

ある「関係性の政治」に重要な貢献を行っているといえよう。ここにおいて、ダルマ／ダンマの理念は、ヒエラルヒー秩序の合理的批判そして存在の平等性への存在論的コミットメントの双方を推進する中心的な概念として機能しており、それによって秩序再構築に向けたダリットの行為主体性を支えている。

## 結論

ダルマ／ダンマの理念はインド史において重要な役割を果たしてきた。しかしその公共的機能については、「近代世俗的国家と伝統宗教的社会」という（ポスト）植民地的な枠組みの中で限定付けられてきた。だが現代インドにおいてデモクラシーの深化が起こるなかで国家と社会の相互作用が高まっており、「世俗的国家」や「宗教的社会」というカテゴリーのアプリオリな正当性が問い直されるに至っている。

現代インドにおいては、人間と人間そして人間と自然の関係のあり方をめぐる「関係性の政治」がヴァナキュラー公共圏における重要課題として現れている。そこにおいて、宗教的言辞はもはやヒンドゥー主義者によって独占されてはいない。本論で示した事例のように、ダルマ、ダンマ、その他の関連用語は、「関係性の政治」の中でさまざまな視角から社会政体関係を再考し、<sup>ウェルビーイング</sup>「幸福」を追求するための枠組として用いられている。普遍的真理との関係において自他のあり方を構築しようとする「宗教的な」営みと、自他の関係について対立と交渉を通じて決定しようとする「政治的な」営みとは、世界の再構築の営みにおいて深いつながりを有する。こうした「宗教的なもの」と「政治的なもの」が重なり合う〈世界性〉<sup>ワールドネス</sup>22の領域において、目的論的な合理性と制度化された宗教との双方の限界を超える可能性をみることができるかもしれない。

現代世界においては、「自然と社会」そして「公共と私秘」の区別はもはやはっきりしたものではない<sup>23</sup>。さらに「合理と宗教」の対立も疑われるにいたっている。こうした背景の中で、これらの対立を超えたダルマ／ダンマの概念は、「関係性の政治」において、あらゆる社会生態学的な関係性を再検討するために用いられるようになっている。ここでは政治的なものと宗教的なものは重なり合いながら、既存の秩序を批判的に再構築しようとする動きがある。アンベードカル主義仏教運動はそうした重要な動きの一つである。こうした動態は、現代インドにおいてこれまで周縁化されていた多様な諸個人・諸集団が公共圏に参加を遂げ、ヴァナキュラー公共圏に多元的な視角が導入されるなかでより活性

<sup>22</sup> Viswanathan, *Outside the Fold: Conversion, Modernity, and Belief*.

<sup>23</sup> ブルーノ・ラトゥール 『虚構の「近代—科学人類学は警告する」』川村久美子訳 新評論 2008年；齋藤純一 『公共性』岩波書店 2000年。

化している。中心的な課題は、新たな秩序にヴァナキュラーな多様性を反映させつつ、同時に、公共的な普遍性を担保することである。そこにおいて、現行秩序の再構築と〈リアリティ〉への探求を結びつけ、全体的な<sup>ウェルビーイング</sup>幸福を追求するために歴史上用いられてきたダルマ／ダンマの理念が、現在また重要な役割を果たしているのは、おそらくきわめて自然なことなのであろう。